

駅前の喧騒が嘘のように静まり返った、バイト先のカフェのバックヤード。

閉店作業も終盤、僕は一人で奥の倉庫に入っていた。新しい在庫の整理を任されたけれど、僕の要領が悪いせいで、高い棚にある段ボールの配置がどうしても上手くいかない。

「……あ、これ、あっちかな……っ」

目的の箱に指をかけようとしたけれど、棚が高すぎて爪先立ちでも届かない。古びた脚立を持ち出してきたけれど、ガタついていて少し怖い。でも、店長の東さんに「ノロマな奴」と思われるのは嫌だった。

だから僕は恐る恐る、軋む段を登った。

「う……っ、あと、ちょっと……！」

指先が段ボールの角に触れた、その時。バランスを崩して、視界がぐにゃりと歪んだ。脚立がガタン

と大きな音を立てて滑る。

（あ……落としたら、怒られる……！）

転ぶ痛みよりも、作業を台無しにする恐怖で目を瞑った。

けれど、地面の硬さはやってこなかった。代わりに感じたのは、厚い胸板の熱と、コーヒー豆の香りが混ざった東さんの匂い。背後から、がっしりとした腕が僕を包み込むように受け止めていた。

「……危ない」

見上げると、そこにはいつもの無表情な東さんがいた。

眼鏡の奥の瞳は、僕を心配しているというより、ただ起きた出来事を淡々と観察しているみたいだった。その整った顔立ちが、近すぎて息が止まりそうになる。

「……っ、あ、す、すみません……っ、ありがとうございます……っ」

(助けてもらった、……んだよね。でも……)

謝りながら、僕は硬直していた。

僕を支える腕とは別に、東さんの大きな掌が、僕のシャツの上から左の胸をがっしりと鷲掴みにしていたからだ。しかも指が乳首を掠っている。

(わざとじゃない……よね？ 支えようとして、たまたま……)

指先が薄い制服越しに、熱を持って食い込んでいく。心臓がうるさくて、頭が真っ白になる。

「……あの棚から無理に取ろうとすると、他のものが落ちてきそう。一旦スペースを作ろう」

「っ、あ……は、い……ごめんなさい……っ」

降ってくるのは、感情の読めない、作業効率だけ

を優先したような低い声。店長としての正しい指示なのに、僕の胸を掴んだままのその手は、離れるどころか指の力を強めていく。

（注意されてるのに……っ。仕事の話をしてるのに……どうして、掴んだままなの……！？）

「高い棚から何かを取るときは気をつけて。怪我をされると、明日のシフトが回らなくなる」

「あ、はいっ……はい、すみません」

「……返事は一回でいいから」

「あのっ、店長……っ」

一度手を離してほしい、と言おうとした瞬間。彼は僕の胸をさらに深く、むぎゅっ♡と押すように揉み、掌で円を描くようにゆっくりと捏ね始めた。

「んんうッ、あ、ああ、店長……っん、その、手が……っ」

「……何？」

「あの、当たって、ます、ん……その、胸に……」

「別に。支えているだけだよ」

東さんは淡々と言った。目は全く笑っていない。

そして、そのまま掌全体で胸の膨らみを包み込み、  
ゆっくりと、けれど確実に揉みほぐしていく。

ぐにゅり♡ ぐにゅり♡ ぐにゅり♡

「……それより、怪我をしそうになったこと、反省  
してる？」

「っ、は、はう……っ、んん、……っ、すみ、ませ  
んっっ」

（だめ……東さんの手が、僕の胸を、逃がさないよ  
うに、むにゅうって……っ！）

東さんは僕を抱きとめたまま離そうとしない。そ  
れどころか、空いた方の手で僕の制服のボタンに指  
をかけた。

「……危ないことした自覚、ある？」

「は、はい……っ、すみません……」

「……口だけなら、誰でも言える。……動かないで。  
怪我の有無を見るから」

それは店長としての業務連絡のような、あまりにも淡々とした声だった。

迷いのない指先で、制服のボタンが事務的に外されていく。

「て、店長、あの、僕は……っ」  
(僕はカントボーイなのに……)

僕は全人口の約15～17%にあたる、カントボーイだ。男性性を持つが、男性器はなく、女性器を持つ。カントボーイは性別・職業・社会階層に関係なく生まれるとされていて、役所・学校・職場への申告義務がある。

「何？」

「あの、僕、男ですけど、性別が……」

「ああ、君がカントボーイってことなら書類で見て

知っているよ」

「そう、ですか……」

コンプレックスから大げさな反応をしてしまったけれど、店長にとっては僕が男なのに女の子みたいな身体をしていることなんて、なんてことないことなのかもしれない。

「あ、あの……っ、店長、自分で、できますから……っ、はう……っ」

指先が露わになった鎖骨や胸元を掠めるたび、僕は情けない声を漏らしてしまう。そのたびに、東さんの眉がわずかに寄った。

「……いいよ、こっちでこのままするから」

そのままシャツが左右に肌蹴て、アンダーウェアごと無理やり胸の上まで捲り上げられた。

ぷるん♡ と、女の子よりは小さいけれど、男よ

りは大きなおっぱいが剥き出しになる。倉庫のひんやりとした空気が直接触れて、羞恥心で全身の毛穴が引き締まるのがわかった。

「や、だ……っ」

反射的に腕で隠そうとしたけれど、それより早く僕の両手は東さんの大きな掌にひょいと持ち上げられ、そのまま頭上の棚に固定された。

「……動かないで。危ないから」

「あ……っ、あ、店長っ……っ！」

腕を封じられ、僕は無防備な胸元を東さんの眼前に晒し続けることしかできなくなった。東さんの視線が、僕の剥き出しのおっぱいに落ちる。彼はそれを確認するように、むぎゅう♡と掌全体で揉み上げた。

「っ、はあ……っ、はううっ、東、さんっ、あうっ